

15. 七重の鋸鍛冶

石山 新一郎

※明治34年2月20日生

私が父と共に、上藻八号沢に入ったのは、大正4年で、それまで、近藤軍之助さん等と常呂にいて、近藤さんと一緒に兄吉雄が、上藻八号沢に一足先に入殖していたので、私たちは1年遅れて入地したのです。冬はサロマ湖の附近は通がつかず、湖の中に張りつめた氷の上を、馬櫓で渡ってきたのですから、三月末ころだったでしょう。

私は8号に落ちついて間もなく、六興の石本国雄さんの居た附近に、四国土佐の人で、衣川金次郎という鋸鍛冶の弟子に入りました。

そのころは、農家でも開拓のために、鋸は大事な道具だったし、造材も盛んになってきたころで、鋸を専門に修繕する仕事があった訳です。しかし主に修繕したのは、木挽き鋸が多く、頼まれて野鍛冶（鋤や斧など）もやりましたが、下手くそでした。

※木挽きは、建築材の柱や板を引き割ったり、枕木などの引き割りで、曲らないように、普通の鋸の倍以上ある巾広いもので、長さは、割に短かった。

この衣川という人は、間もなく忍路子入口の七重に移転しました。

附近に出口善兵衛さんが、雑貨と飲食店をやっており、名前は忘れたが、老人夫婦2人だけでうどん屋をしていた人が、大正7年の感冒が大流行したとき、夫婦共死んだそうです。

また宿屋などもありましたが、私は1年半ほどの奉公で辞めてしまい、八号に帰りましたが、安部時平さんが、此所へ出て来て宿屋を始めたのは、私が八号へ帰ってからだと思います。

八号沢には、近藤求太郎、近藤軍之助、近藤岩太郎、近藤時光、横関治平の皆さんや、兄吉雄に、役場にいる佐々木（正）さんの祖父や、白川優さんの父なども居り、鈴木市五郎（子、光郎）の跡に追田喜三郎さんが入っていました。

そのころの鍛冶屋の奉公などは、とても辛いもので、今思い出しても、ぞっとするくらい、酷いものでした。